
監禁するのはいけません

みもこちと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

監禁するのはいけません

【Nコード】

N0758T

【作者名】

みもこちと

【あらすじ】

クリステイアーノは、婚約者からの求婚を断つたので監禁されてしまいました。「・・・なんで?」「いや、考えなくてもわかるだろ」部屋からは一步も出られないし、足枷もついている。でも、面会はある。行為を強いられるわけでもなく、ただ婚約者の説得を試みる。そんなゆるゆる監禁ライフ。

鎖をつけてはいけません

クリスティアーノは困っていた。

何に？と言われると多すぎて抜き出せないのだがさしあたっては現状に。

クリスティアーノのいる四角のただっ広い部屋には、不自然に小さな二つの窓がある。外側に、手を触れないとわからない鉄格子が存在している。

ドアは三つ。彼女の座るベッド（どう見ても一人用ではない）の正面にあるドアは廊下につながっている。衛兵が二人並んでるらしい。

左側はトイレとバスルームに行くためのドアだ。はじめて部屋に来たとき、「トイレに行きたいから出してという手は使えない・・・」と彼女が呟いたら従僕から「牢屋じゃないんですから」と返された記憶がある。

2

右側のドアが一番、役に立たない。

なぜなら彼女をこの状態に追い込んだ本人の部屋に続いてるからだ。

クリスティアーノはなぜこんなことになったのか。

彼女がこの部屋に置かれるようになったのは三カ月前からだった。きっかけを彼女は理解できない。

とりあえず最初は部屋に備え付けてあった本棚の膨大な数の本を楽しく読んでいたが、二週間で飽きた。

暇だと原因の男に文句を付けると今度は面会人が現れた。

家族と幼なじみと使用人。

両親と兄は頑張り！とクリステイアーノを応援し、姉は愛ってすばらしい！とわけのわからない感動をし、弟妹は腹を抱えて爆笑していた。

幼なじみは苦笑し「また来るから」の言葉通り時々、ここを訪れている。

使用人は二人の馴染みの従僕とメイド。

三週間目に感動の再会をし、一ヶ月目にしてクリステイアーノ付きを許された。

面会があるうと暇は暇で、とにかく外に出ように励んだ。

大概は防がれたが、一カ月と十五日目にして成功。

だが、久しぶりに庭で寝転んでいたところをクリステイアーノに忠実であるはずの従僕に見えられて部屋に戻された。

優秀な従僕曰わく、「置いてかれたと思いましたので」

クリステイアーノが次は連れてこうと誓ったのは言うまでもない。

さらに、いつも自分の部屋があるにも関わらず同じベッドのちよつと離れた所で寝る男に、その日はがっちり捕まえられて眠るはめに陥った。

クリステイアーノが懲りずに外に出ようとしまくと男はついに行動を起こした。

三カ月目の昨日、男はやけに上機嫌な顔で部屋に入ってきて、「アーノに、贈り物」と照れながら言ってきた。

あまり良い予感がしないクリスティアーノへにっこり笑いかけて、男はいそいそと彼女の右足首に足枷をはめた。

細く長く上品な金色の鎖がベッドの脚につながっていて、クリスティアーノが動かたびしゃしゃらと鳴る。

うるさいと苛々したときに、はじめてクリスティアーノは気付いた。

「——もしかして、監禁されてる？」

甘え過ぎてはいけません

「は？今更何言ってんだ。アーノ」

衝撃の事実に気付いたクリスティアーノに、呆れたと言わんばかりの一言がかかる。

彼女が目を向けた先に居るのは、実は朝から部屋に来ていた幼なじみのレオナルドだ。

面会に来たわりに会話はそこそこに済ませ、今はアーノから右にあたる壁に何かしらを刻んでいる。

レオナルドの言葉に、これまた朝からいてお茶を用意しているメイドのタリアが続いた。

「監禁というより、軟禁でしょうか。まだまだ甘いと思いますよ」

アーノにベッドから椅子へ移動するよう促しながら、につこり笑う。

「甘いか？足枷だぞ」

レオナルドが作業の手は止めないまま、不思議そうに聞いた。

「本気でアーノ様を監禁しようと思うなら両手両足にすべきですわ。片足だけで何が拘束ですか。片腹痛いです。それ以上にお二人は未だ清い関係を維持したままですし」

「うわーへたれ」

「本当に！全くなんのための監禁ですか。一度、進言して」
「やめて」

流すに流せなかった最後の台詞をアーノが止めた。
椅子に座って、胸を張る。

「レオもタリアも何よ。いいじゃないの清い関係。爽やかで。問題は監禁よ。私は監禁だか軟禁だかをされてたわけ？」

「本気で気づいてなかったのか！」

「鈍いですわアーノ様」

「だって、いつもの癖が妙に長引いてるだけだと」

「癖？何ですかそれ？」

首をかしげるタリアに、レオナルドが困ったように答えた。

「あータリアは知らないか……。あいつ、疲れがたまるとアーノから離れなくなるんだ。というか、まだ続いていたのかあの悪癖。俺は子どもの時だけだと」

「いや時々ね、時々……」

わかりやすく目をそらしたアーノから、何らかを察するのは容易い。
タリアは愕然と頬に手を当てた。

「陛下に……。！御年二十三歳の一国の王ともあろう方に甘え癖ですか……。！」

そう、一国の王。

クリステイアーノを現在進行形で監禁している現在二十三歳の甘え癖のある男は、大陸の南にある大国シルケットを治める若き王、フリリップ・ルータ・シルケットだった。

あらためて言われると余りにいたたまれなくてアーノは椅子で身を縮める。

代わりに陛下に仕える騎士のレオナルドが手を止めて振り返り、タリアを諫めた。

「タリア！甘え癖っつー言い方は止める。威厳がなくなる」

「言い方を変えても甘え癖は甘え癖では……。それに女の子を監禁していらっしやる時点でもう威厳も何も」

「う……………」

そしてあっさり負けた。

レオナルドも元々思っていたことらしく、明らかに分が悪い。

三人の周りに気まずい空気が漂った。

結界を張ってはいけません

微妙な空気に耐えきれずアーノが声を上げた。

「そ、そんなことよりお茶飲みましょ。ほらレオも！」

二人もそれ以上は何も触れず、レオナルドは席に座り、タリアはお茶を淹れた。

さつさと話を変えようとアーノはレオナルドに話しかける。

「そつえばレオ、やけに長い時間いるけど仕事は？」

いつもなら面会にきても三十分がせいぜいの陛下の近衛騎士がやけに長居している。

レオナルドは壁をちらりと見て笑った。

「今日は休日返上でここの結界の張り直しだ。一日かけて強化しろと、陛下からのお達しだね」

「アーノ様が五日単位でダメにしていますから……。必死ですわね陛下」

この部屋には特定の人物以外が出入りできないよう、結界が張っている。

拘束の魔術を得意とするレオナルドの作った、実は王の部屋のより強い特別製だ。

しかし、器用なアーノは結界の解除など朝飯前で、フィリップを悩ませていた。

アーノは心持ち体を小さくする。

「そんな手間かけるくらいなら、逃げない女の人見つけた方が早くない？ほらフォル家の令嬢とか」

若くて美人で魔力が強いと評判である友人を挙げるが、すげなく拒否された。

「却下。陛下が認めるわけないだろ」

「そちらの方が無駄な労力ですわね」

アーノは頭をかかえる。

「私は外に出たいのに。もう、どうしてこんなことに・・・」

「どうしてってアーノ。あんなことがあつたら当たり前だろ」

「あんなことって？」

「ああ、あの事です」

「あの事だ」

二人だけで通じ合っている様子にアーノは困惑する。

タリアは新しく紅茶をついで、そんなアーノに目を合わせ、いい笑顔で言った。

「婚約者からいきなり婚約破棄を申し出られたら、驚いて監禁くらいしますでしょう」

結界を張ってはいけません（後書き）

次は監禁の原因です。

やっとフィリップが出せそうですが、まさか初登場が過去話・・・。

逃げてはいけません

ことの起こりは三カ月と一日前。

自分の屋敷でのんびりしていたアーノは、フィリップから呼び出され、自分も話があったから幸いと日が沈む前に城へ向かった。

フィリップの部屋の前で会ったレオナルドに挨拶して、ノックしてから扉を開ける。

直後に手が伸びてきて、部屋にひきづり込むように抱きしめられた。後ろの扉が多分レオナルドによって閉められる。

アーノは驚いたが、抵抗はしなかった。

犯人が誰かなと言うまでもない。

「フィリー」

アーノは自分の肩辺りに見える白金を軽く叩いて、はなすよう伝える。

フィリップは少し体を離し、でも腰にまわした手はそのまま視線を合わせた。

「久しぶり、アーノ。会いたかった」

女なら誰でもころっと落ちてしまいそうな笑顔を浮かべて、アーノの頬を撫でる。

ついでに頬へキスも落としてきて、アーノはため息をついた。

「疲れてるの？」

「少し」

まいるとスキンシップが増えるのはフィリップの癖だ。

即位してから半年経つが、まだいろいろと多忙なのだろう。

フィリップは、アーノの肩に頭を乗せる。

「アーノ、王様って大変だよ。やるが多すぎる。特にアーノにめったに会えないのが嫌だ。はあ・・・兄上が逃げた気持ちかわかる気がする」

アーノは苦笑して、フィリップの頭を撫でた。

このフィリップ・ルータ・シルケットは先代の王の弟の第四子として生まれた。

先代には優秀な一人息子がいて、さらにフィリップの上に三人も兄がいるのだから、彼に王位がまわってくるはずはなかった。

しかし人生はわからない。

フィリップが20才になった頃、優秀なはずの王太子が若い年してどこぞの娘と駆け落ちしてしまったのだ。

その上、一番上の兄は王なんてごめんだと家出、二番目の兄は病気にかかり自分から辞退、三番目の兄はそのころ既に他国へ婿にいていた。

王弟である父は老齢を理由に王太子の座を断り、残ったのはフィリップと年の離れた弟だけであった。

こうして陰謀でもなんでもなく、とんとん拍子にフィリップは王太子となり、数年も経たないうちに先代が亡くなって王位についた。

幼い頃からフィリップの婚約者であるアーノにも到底予想しえなかった事態だった。

「元氣かしらね、ピエール様とフランシス様」

「あの人達ならどこでも上手くやってけるだろうさ。人にいろいろ押し付けといて全く・・・まあ、いいけど。それより、アーノ」

元王太子と家出人の名前にフィリップはため息をつき、氣を取り直して顔をあげた。

逃げてはいけません（後書き）

逃げたのは元殿下と兄という。
次に続きます。

怒ってはいけません

フィリップがアーノの両肩に手を置く。

決意を込めたような赤い瞳にアーノは首をかしげた。

「僕が王位について半年だ。国も落ち着いてきたし、僕も執務になれてきた」

「うん、お疲れ様」

労るように頭を撫でれば、そうじゃなくて、とフィリップは首をふる。

「アーノは十六になっただろう」

「まあ体はね」

「・・・そこは置いといて」

本当は十六をとつの昔に過ぎているアーノは、自分の言葉が別の意味できわどいことに気づかない。

フィリップは顔を赤くして目をそらしたが、すぐに立て直す。

「宰相の許しはもらった」

宰相とはアーノの兄だ。

フィリップの一つ上で幼なじみの一人である。

兄と何か関係がある話なのだろうか、とアーノは思う。

「周りからもせかされてるし、そろそろいいと思うんだ」
「何が？」

アーノが遠回しな物言いにじれったくなってくると、意を決したようにフィリップが言った。

「結婚だよ」

「結婚!？」

アーノは驚いて、フィリップの顔を両手ではさんだ。そのままじっと見つめる。

「そうね、そうよね、フィリーももういい年だものね。このままじやいけなかったわ」

「・・・! だったら今すぐ!」

顔を近づけてきたフィリップを押しとどめて、アーノは言った。

「ちょっと待って。準備が必要だわ」

「問題ないよ。僕が全部整えた。明日にでも結婚はできる」

「お嫁さんが必要よ?」

「いるじゃないか」

アーノは驚いたように口をおさえて、すぐに訳知り顔で頷いた。

「そういうことね! うん、わかってるわ。今すぐ行動しましょう」

「アーノ・・・!」

感極まったフィリップがまたアーノを引き寄せようとして、また止められる。

「ちょうど良かった。私の話もそれだったの」

アーノは手を伸ばしてフィリップの髪を撫でながら、優しく清々しく、爆弾を落とした。

「婚約破棄しましよ、フィリー」

フィリップは絶句した。

そんな彼の様子に全く気づかず、アーノはうきつきと言葉を続ける。

「私もそろそろ潮時だと思ってたの。フィリーは大人になったし、しかも王様になっちゃうし。私は王妃なんて柄じゃないもの。兄さんに許可ってそのことだったのね？心配しなくて大丈夫よ。子どもの頃の婚約を破棄するくらい、簡単なんだから。ね、だから婚約破棄しましよ」

この時、フィリップは天地がひっくり返ったかと思うほどの衝撃を受けていたのだが、アーノに知る余地はない。

「お嫁さんがほしかったんでしょ？もう、好きな人がいたなら言ってくれば良かったのに」

ここにレオナルドがいたら、アーノを止めただろう。

しかし、不幸にも部屋にいるのは二人だけだった。

アーノは輝くような笑顔で言い切った。

「私、応援してるわ」

ぼんっ、と低い爆発音。

アーノの前方、フィリップの後ろにあったテーブルが一瞬で燃えカスになった。

フィリップの魔法である。

「フィリー!?」

目を見開いたアーノの顔を、フィリップがゆっくり両手でおさえた。

「どうしたの? テーブル燃やしちゃって。あと、顔が怖いわよ」

「アーノ」

フィリップはいつもより大分低い声でゆっくりとアーノに聞いた。

「婚約破棄、したいの?」

「うん」

アーノが心のままに即答する。
頬をとらえる力が強まった。

しばらく考えるような沈黙のあと、フィリップは小さく笑みを見せて、言った。

「ごめん、やっぱり無理」

何が?と思う間もなく、アーノの視界は暗転した。

怒ってはいけません（後書き）

次は現在に戻ります。

クリスティアーノのひどい勘違いは、婚約した時点で歪みが生じていた結果なのですが、それはおいおい。

逃がしてはいけません（前書き）

ちよつと予定が変わってアーノが眠った後の話です。

逃がしてはいけません

夜になってもアーノが陛下の部屋から出てこない、ということでおナルドはそわそわしていた。

まさかあの二人に限って婚前交渉はないと思うが、万が一ということも考えられる。

下手に部屋に入ること出来ず廊下を行ったり来たりしていると、陛下の部屋ではなく隣の王妃の部屋の扉が開いた。

そこからこの世の終わりのような顔をしたフィリップが顔を出してレオナルドに来るよう命じる。

「何かあったんですか？クリスティアーノ様は？」

「中で説明する」

レオナルドが部屋に入るとベッドに寝転がるアーノが目に入って仰天した。

「陛下、アーノに何やっただんですか！」

「眠らせた」

目も合わせず端的に言われる。

本当にそれ以外には何もしてないようでアーノの服がはだけた様子はなかった。

レオナルドはほっと胸をなで下ろす。

「なんでそんなことを」

「婚約破棄したいと言われた。僕が他に好きな人がいると思って、さらにアーノ自身が王妃になりたくないから」

あちゃーと呟くレオナルドを後目に、フィリップはよろよろとベッドに座り、眠るアーノの銀髪に指をからめる。

「僕はそれを認められない。だけど、アーノはやると言ったらやる。だから閉じ込めることにしたんだ。レオナルド、この部屋に結界を張れ」

「・・・話し合いの余地は？」

事が事なので一応聞いてみると、フィリップは深いため息をついた。

「ない。正直、無理。アーノの性格は、レオだって知ってるだろ」

「まあ思い込みの激しさと強情さでは並ぶ者なしかと」

レオナルドは幼なじみのすっ飛んだ言動の数々を思い出して遠い目になる。

アーノから目を離さないままに、フィリップは苦い顔をして言った。

「アーノは王妃にならないと言ったら絶対にならないし、そのために他の男と結婚することも辞さないよね」

「否定しません」

フィリップは眠るアーノの頬を軽く撫でる。

「今まで散々利用してくれた挙げ句に僕を捨てようって・・・本当、憎らしい」

暗い笑みを浮かべてレオナルドを見た。

「もっと都合良い人でも見つけたのかな。誰かわかる？レオ」

「俺じゃないのは確かなので殺気立たないでくださいよ。・・・つて、あつっ！てめえ！俺を燃やす気か！」

レオナルドは服の裾に火がついているのに気づき慌ててもみ消す。思わず敬語も忘れて怒鳴れば、フィリップは無意識に行っていたことらしく、あれ？ごめんとあつさり謝ってきた。心はまったくこもってない。

「レオはあまり疑ってないよ。そういう意味ならベンジャミンの方が怖い」

主人に忠実な従僕を思い出して、レオナルドは眉をしかめる。アーノが頼めば王に逆らって駆け落ちするのも辞さない少年だ。

「させないけどね。・・・アーノは鈍いから監禁されてるなんて当分気づかないだろう。その間に外堀を埋めてやる。協力しろ、レオナルド・フランク」

「・・・お手柔らかに」

「アーノが考え直してくれたらね」

フィリップはそつとアーノの額に唇をのせる。

「アーノ、僕のクリスティアーノ、あの時に僕を選んだのは君だよ」
絶対逃がさない、と呟くフィリップを見ながら、レオナルドは今後の騒動を思ってたため息をついた。

逃がしてはいけません（後書き）

次こそ現在に！

フィリップがなんだかとってもヤンデレですけど、これアーノが寝てるので調子乗ってるだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0758t/>

監禁するのはいけません

2011年6月6日08時47分発行